

平成 29 年度専攻科食物栄養専攻自己点検・評価報告書

	目 次	頁
自己点検・評価メンバー	1
専攻科 食物栄養専攻の運営	1
I 教育	1
1 教育課程	1
2 教員組織	3
3 オムニバス授業	3
4 臨地実習	4
5 学位取得	5
(1)特別研究		
(2)学位授与審査		
6 管理栄養士国家試験対策	6
7 教育課程懇談会	6
II 学生支援	6
1 学生指導	6
2 進路指導	7
3 資料（修了時アンケート・過去3年間）	7
III 地域貢献	8
1 研究・社会的活動・所属関連団体研修	8
2 公開特別講演会	9
3 公開講座	10
IV 入学者確保	11
1 学生募集	11
2 入学試験	12
3 広報	12
V マネジメント体制	15
1 自己点検	15
2 FD/SD活動	15
3 資源の有効利用	16

自己点検・評価メンバー

自己点検・評価項目	メンバー
概要	
専攻科食物栄養専攻の運営	田淵 英一 富岡 徹久 深井 康子
Ⅰ 教育	堀田 裕史 竹内 弘幸
Ⅱ 学生支援	稗苗 智恵子 樋口 康彦 山岸 博美
Ⅲ 地域貢献	高木 尚紘 大森 聡 角田 香澄
Ⅳ 入学者確保	稲場 暁子 廣田 恵巳 宮田 佳奈
Ⅴ マネジメント体制	

専攻科 食物栄養専攻の運営

I 教育

1 教育課程

(1) 実績

1) 平成 29 年度のカリキュラム改訂

平成 27 年度は「小児発育特論」を「発達心理学特論」に名称変更し、平成 27 年度入学生から適用し、2 年次配置科目であるので平成 28 年度から開講した。また平成 29 年度から栄養士総合演習Ⅲを新たに設けた。

2) 学士（栄養学）希望者取得状況

平成 30 年 3 月修了生 15 名のうち、(独) 大学改革支援・学位授与機構から 9 名が学士（栄養学）を受け、残り 6 名は平成 30 年 4 月期再申請手続きをとった。全員合格を目標にしているが、本学専攻科始まって以来の大変厳しい数字になった。原因の分析をするとともに、早急な対策が求められる。

3) 平成 23 年度からの開講時期早期化と管理栄養士国家試験高い合格率

平成 29 年 3 月修了生は 5 月の管理栄養士国家試験合格発表で受験者 16 名中 15 名が合格し、合格率は 93.7%であった。今年度は、管理栄養士の国家試験のシステム変更のため、専攻科生で受験する者はいない。合格率アップのため、研究生に対する勉学、生活態度に対する指導が求められるとともに、定期試験および管理栄養士模擬試験において成績が下位だった学生に対する集中的な指導が求められる。

4) 学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針

専攻科修了の方針、教育課程編成・実施の方針ともとも再検討はしたものの、特に細部の字句の表現以外に変更の意見はなかった。専攻科の授業科目コードの採番と科目分類方式は、

4年制栄養士養成課程として厚生労働省届け済み教育課程を基本としている。今後の科目コード等を再検討する際には、4年制栄養士養成課程の教育課程との関係の検討も必要である。

5) 授業回数の15回完全実施

平成29年度では、平成26年度から実施の食物栄養学科に合わせ、全科目授業回数半年15回の完全実施を行った。

6) Webシラバスとその付加機能

平成26年度から印刷物によるシラバス配布は廃止しWebシラバスのみになった。またWebシラバス付加機能が充実してきた。学生には、シラバスは紙媒体ではなくWebで見るもの、という意識が定着してきた。

(2) 課題

1) 管理栄養士国家試験受験体制の基礎固め

平成29年度管理栄養士国家試験より3月初旬試験、3月下旬合格発表となり合否までの期間が短縮された。このため申込み時に受験資格取得見込みでは受験できなくなった。平成28年度入学生から、実務経験1年後入学した専攻科生は、修了年度の翌年度に受験可能で修了から約1年空くため、研究生制度を新たに設けた。

- ① 在学中は、1年次から受験意欲を高め、修了時まで合格ラインに達することを目標とする。授業では試験勉強に資する内容を増やし、学生は自助努力を促す雰囲気作りをする。
- ② 修了後、無料で研究生として学校施設を利用して勉学できるよう規程を改正し、また就職にあたっては勉学を最優先するよう学生に働きかけ、また専攻科としても就職希望者には勉学しやすいところを紹介できるように努力する必要がある。

卒業後の進路についてのアンケート調査の結果、就職を希望する学生もおり、個別の対応が必要である。

2) 授業時間外の学習時間の向上

専攻科は講義科目が多く、文部科学省の基準どおりの授業時間外の学習時間確保には、体系的な方法をとる必要があると認識している。そのための施策は平成30年度に向けて、じっくり対応するべきであろう。

3) アクティブ・ラーニング授業比率向上

同様にアクティブ・ラーニング授業比率も講義が多く、平成30年度に向けて、施策はじっくり対応するべきであろう。アクティブ・ラーニングを促す情報環境については、栄養計算ソフトの活用できる環境づくりを目指す。

4) 地域関係の授業・研究の維持・充実

特別研究で地域関連研究は1件である。他にも地域を対象とする調査・研究も検討されており、今後も地域関係の授業・研究の維持・充実が望まれる。

5) 平成29年度の専攻科の認定に向けての準備

専攻科は平成 17 年度に(独)大学改革支援・学位授与機構の課程認定を受け、平成 22 年度に審査を受けたが、本年度は 2 度目の審査の年であった。平成 29 年 5 月学位授与機構へ書類を提出し、幸いにも平成 30 年 2 月に適格認定を受けることができた。

2 教員組織

(1) 実績

平成 29 年度は 9 名で「特別研究」を担当した。

専攻科は開設以来 13 年目を迎え、平成 22 年度に原則食物栄養学科教員すべてが専攻科の授業と特別研究を担当するようになって以来、全体として教員組織は充実している。ただし食物栄養学科及びその他の授業の担当らより、やや負担が過重と思われる担当者も存在する。また、学位認定試験において不合格者を出したゼミにおいては、今後の取り組みを考える必要がある。

(2) 課題

平成 29 年度末定年退職する教員 1 名の補充に新任教員 1 名が平成 30 年度採用予定である。なお専攻科には 70 才以上非常勤講師が 3 名いるため、教員組織の若返りが期待される。

3 オムニバス授業

(1) 実績

平成 29 年度に実施されたオムニバス授業は以下の通りである。

科目名	所属先・講師名	開催時期又は回数/要 旨	学外参加者
公衆栄養学 特論Ⅰ	桑守豊美名誉教授	11 回	2 名
	由田克士大阪市立大学教授	4 回 6 月 2 日(金)3~4 限、6 月 3 日(土) 1~2 限【公開授業】 「日本人の食事摂取基準 2015 年版」を基 に現場栄養士に必須の「摂取基準の活 用」、「国民健康・栄養調査」、「食生 活改善の目標」、「健康日本 21」等の解 説。	
公衆栄養学 特論Ⅱ	桑守豊美名誉教授	12 回	
	稗苗智恵子准教授	3 回	
保健衛生学 特論Ⅱ	石塚盈代名誉教授	9 回	
	木村郁子講師	6 回	
臨床栄養学 特論Ⅱ	小野章史川崎医療福祉大学 教授	3 回 6 月 16 日 1~3 限 最近特に(管理)栄養士に必須の知識とな っている臨床栄養学を分り易く講義され た。	
	稗苗智恵子准教授	12 回	

栄養士総合 特論Ⅰ	桑守豊美名誉教授	2回	
	専任教員	13回及び国家試験模擬試験2回	
栄養学特論Ⅲ	宮本嘉明准教授	5回	
	酒井秀紀富山大学教授	3回	
	藤秀人富山大学准教授	4回	
	木村郁子富山大学教授	3回	

(2) 課題

公開授業で学外からの参加者が少ない点が改善されておらず、今後とも改善策検討の必要がある。大阪市立大学教授由田克士先生の授業が公開授業化されたが、全体としては減少したままである。

4 臨地実習

(1) 実績

1) 公衆栄養学特論Ⅲ

専攻科2年生15名が、厚生センターまたは保健所で臨地実習（公衆栄養学特論Ⅲ、1単位）を下記日程により5日間行った。

2) 臨床栄養学特論Ⅳ

平成21年度より、臨床栄養学特論Ⅳにおける病院実習期間を1週間から2週間に増やしている。また、平成25年度から、学則を変更して授業1単位から2単位として実施している。平成30年2月5日（月）～3月9日（金）、専攻科1年生全14名が1施設1～2名で、下記の受託先の県内総合病院において臨地実習を行った。今年度は県西部地域在住の学生が多かったことから、市立砺波総合病院、南砺総合病院へ初めて臨地実習を依頼した。

3) 事前、事後意見交換会及び報告会の実施

どちらの実習においても、意見交換会を実施し、意思の疎通をはかっている。参加者も年々増えて協力機関との連携がスムーズになってきており、よい方向に向かっていると思われる。現場での実習は、学生たちにとって一生のうちでも数少ない貴重な体験となり報告会でその成果を伝えている。改めて関係者の皆様の協力に厚くお礼申しあげたい。

(2) 課題

1) 公衆栄養学特論Ⅲ

臨地実習（保健センター）は1週間（1単位）しかないため、行政の実務や栄養行政の現状を十分に理解するまでには至っていない。この対策として、実習日数を増やすなどの措置が必要ではあるが、学生にとっては、特別研究などの授業、管理栄養士国家試験受験、学会発表など多様なイベントがあるため、現状で手一杯と考えられる。また、平成31年度から隣県からの実習性受け入れもあるということで本学学生の受け入れは早期からご依頼しておく必要がある。

2) 臨床栄養学特論Ⅳ

管理栄養士養成のための臨地(病院)実習の時間を90時間としたが、他の医療職種と比較して短時間で、管理栄養士業務の習得と実践にはまだ不十分である。しかし一方、医療現場では、年々、患者さんやチーム医療において他の医療スタッフと直接話す機会が増えている。臨地実習を通して、実際の医療現場に携わることにより、知識と技術の不足や判断の重要性などを認識することや、実習指導者の姿に感動したりするなど、学生の学習意欲の高揚につながっている。

5 学位取得

(1) 特別研究

1) 実績

専攻科1年次には特別研究中間発表会を10月に実施して、特別研究の研究計画や実施状況を研究グループごとに発表した。また、専攻科2年次には全ての学生が国内の栄養・調理系学会で発表し(本自己点検報告書「Ⅲ. 地域貢献 1. 研究・社会的活動・所属関連団体研修 (1) 研究「所属学会・研究会・研究発表等」)、特別研究発表会を11月に実施した。

2) 課題・行動計画

特別研究発表会は2会場で同時進行するので、教員はどちらかの会場に分かれて発表を聞くことになる。そのため、全ての発表を聞くことができない。また、時間的制約のため発表に対する質問もすることができない等の課題がある。平成30年度は複数回の発表日を設定し、教員が全ての発表を聞くことができるようにし、さらに質問の時間設定することを検討する。

(2) 学位授与審査

(1) 実績

専攻科2年15名全員が、学士取得のため学位授与審査の申請を行った。4月のオリエンテーション期間中3日間をかけて、単位修得状況申告書の作成方法を説明し、各自申告書を作成し、専用診断ソフトにかけて単位修得状況申告書の内容を検証した。7月上旬には、学位授与申請書や住民票など、その他に必要な書類の作成等について説明し、9月中旬に学習成果以外の書類についての準備を終えた。9月末までに学習成果(レポート)を完成させ、申請書を郵送した(10月期申請)。学習成果の定着を確認するための試験が、平成29年12月17日(日)に実施された。平成27年11月11日に特別研究発表会を実施し、試験対策のため発表を聞いた教員および専攻科生が想定質問を作成した。審査の結果9名が合格した。

(2) 課題

残念ながら6名の不合格者がでた。研究テーマ又は研究手法が難しい内容であればあるほど、研究内容自体の把握、周辺知識を固めて小論文試験に臨むことが必要である。また研究目的は不合格の6名に関しては、指導教員を中心に対策をとり平成30年度4月期再申請の予定である。平成27年度修了生で学位未取得の2名も再申請する。

6 管理栄養士国家試験対策

(1) 実績

- 1) 平成 29 年 3 月に実施された第 31 回管理栄養士国家試験には、専攻科を修了した 16 名全員が受験し、15 名が合格した（合格率 93.8%）。
- 2) 試験の制度が変更したため平成 29 年 3 月卒業する専攻科修了生は第 32 回管理栄養士国家試験を受験せず、平成 31 年 3 月に実施予定である第 33 回管理栄養士国家試験を修了生 15 名全員が受験予定である。
- 3) 平成 29 年 6 月 16 日(金)には専攻科 1 年生を対象に、11 月 2 日(木)には専攻科 2 年を対象に、川崎医療福祉大学の小野章史教授を講師に招き、特訓講座を開講した。

(2) 課題

第 31 回管理栄養士国家試験の学内合格率は 93.8%と全国の管理栄養士養成課程（新卒）の合格率 92.4%を上回ったが、今年度専攻科修了生は試験制度の変更に伴い、受験のタイミングが 1 年遅くなる。その間、修了生は研究生制度を利用して勉学に励むが、今年度と同様に全国の管理栄養士養成課程（新卒）の合格率並みの合格率を維持していけるかが問題である。

7 教育課程懇談会

実施日：平成 30 年 3 月 22 日(木)

場所：食物栄養学科会議室 F314

参加者：専攻科食物栄養専攻 教職員 14 名

懇談内容：この 1 年を振り返って(研究生について)

II 学生支援

1 学生指導

(1) 実績

1) 休学・退学等の状況

1・2 年生ともに休学および退学者はいなかった。

2) 体験研修

目的：専攻科 1 年次学生に日本のトップレベルの施設および栄養士業務を見聞させ、自分の将来像を明らかにし、今後の勉学に役立てる。

対象： 専攻科 1 年生 14 名 教員 1 名 参加

日時： 平成 29 年 9 月 21 日（木）～22 日（金） 1 泊 2 日

研修場所：

① かずさ DNA 研究所

② 独立行政法人 国立健康・栄養研究所施設見学

3) 大学祭への参加および保護者懇談会

今年度は、大学祭の学科企画として、専攻科1年生の特別研究中間発表会（平成29年10月21日（土））を実施。21日（土）午後に保護者懇談会の時間を設けた。

(2) 課題

大学祭では1年生の学習成果発表会を行ったが専攻科生の研究活動を内外に知らせるチャンスでもあることから学習成果発表会への参加者数が増えるよう工夫が必要と思われる。

2 進路指導

(1) 実績

- 1) 今年度から修了時に管理栄養士国家試験受験できなくなったため、修了生15名は全員が研究生となった。
- 2) 修了生は、管理栄養士インターンシップや栄養士関連業務でスキルアップをはかることとなった。

(2) 課題

- 1) 今年度から研究生という新たな進路ができたが、次年度、管理栄養士国家試験受験し確実に合格するための着実な学習体制と合わせて、栄養士、管理栄養士としての実務能力を高める必要がある。
- 2) 2年修了時に教養科目対策講座を4名が受講している。今後は研究生となってから管理栄養士求人に応募することとなる。ここ数年、富山県や富山市等の公務員や総合病院に就職する実績があることから、研究生での就職活動支援が必要である。

3 資料（修了時アンケート）

(1) 実績

- ・平成29年度 修了時アンケート集計結果
富山短期大学（抜粋）平成29年3月実施 回答者数15名中15名（100%回収率）

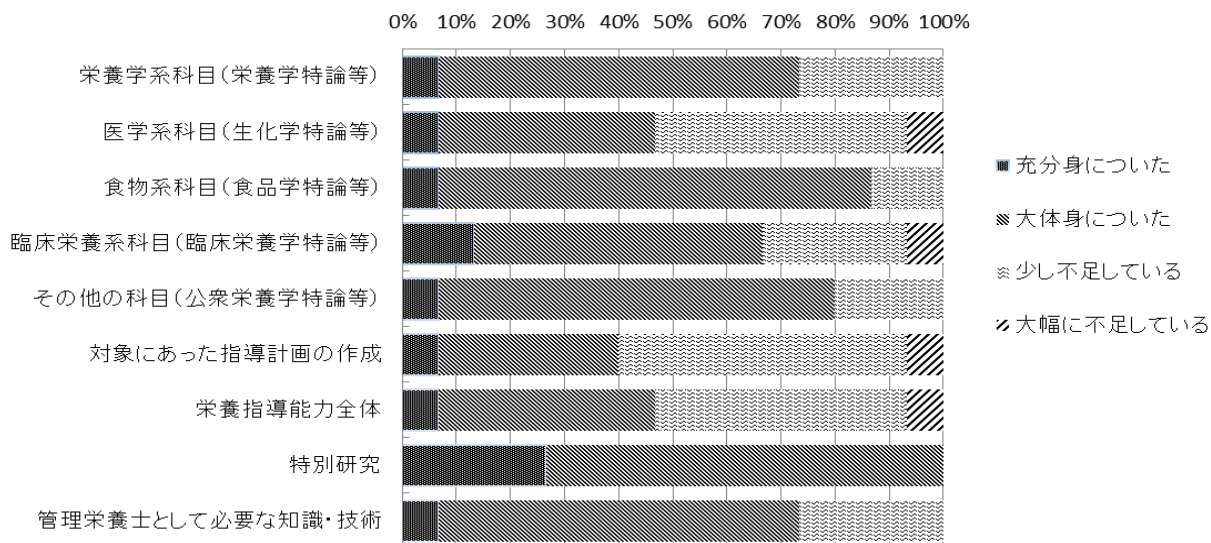
1 専攻科食物栄養学科に入学して良かったと思いますか。

大変良かった	良かった	どちらとも いえない	あまり 良くなかった	良くなかった	計
7	4	3	1	0	15

「あまり良くなかった」を選んだ理由

- ・仕方ないことであるが、在学中に国試を受けられなくなり、気持ちとしても大変不安であるから。

2 どのくらい身に付きましたか。



3 専攻科食物栄養専攻に期待するものは何かありますか。

- ・心理的な勉強もできたら良いと思います。カウンセリング的な事も学べたらと思います。

4 研究生になるにあたり、期待していること、不安なことは何かありますか。

- ・先生方もお忙しいと思うので毎日じゃなくて良いので勉強等の指導に対するものがあったら良いかなとも思いました。
- ・メリットが少ない。
- ・就職
- ・分からないことがありすぎて、不安しかありません。

(2) 課題

専攻科修了とともに国試を受験できなくなった最初の卒業生である。専攻科に入学して良かったかどうかは、「どちらともいえない」「あまり良くなかった」が全体の約 27%を占めた。1年間の研究生をどのように過ごし、国試対策を行ったらよいか、不安に思っていることがわかった。今後は学習および生活面でのサポートが課題だと感じた。

III 地域貢献

1 研究・社会的活動・所属関連団体研修

(1) 実績

1) 研究

多くの教員が、富山短期大学紀要へ投稿を行っていた。また、執筆等についても積極的に行っている教員が多くいた。また、全教員が、日本栄養改善学会や日本調理学会を中心に学会発表を行った。

平成 28 年度科学研究費助成授業基盤研究の代表研究者 1 名・分担研究者 1 名、一般財団

法人旗影会助成金の代表研究者1名、富山第一銀行奨学財団研究助成金の代表研究者2名・分担研究者1名、青少年育成富山県民会議 若者発！富山の社会福祉実践事業の代表研究者2名・分担研究者1名など、多数の外部研究助成を受託して研究活動が行われた。また、学内助成金である学長裁量経費について5名が獲得した。

2) 社会的活動

各教員は、富山県内の地域を中心に、多数の講演・講義・シンポジウムを行った。また、複数の教員が行政や学会等の役員を務めていた。

3) 所属関連団体研修

所属関連団体の研修として、富山県栄養士会、富山県栄養士会総会、生涯学習研修に参加した。

(2) 課題

大半の教員が、研究を精力的に行っており成果を論文や学会に発表している。その一方で、一部の教員については、自己の専門分野に関する研究活動が十分に活発であるとは言い難いので、教員全員が積極的に行い、研究業績を積み上げていく必要がある。地域を中心に数多くの講演等を行っており、地域貢献という関連からは望ましい状況であるが、教員の業務負担増が懸念される。

2 公開特別講演会

(1) 実績

昨年度から、食物栄養学科と専攻科の特別講演会を合併して開催している。講演会の演者は、栄養士・管理栄養士に必要とされる専門的な内容を様々な視点からの講演内容となった。

公開特別講演会 平成29年9月30日(土) 9:10~12:20 富山短期大学

演題	講師名	参加者
「スポーツと健康のための栄養学-筋肉づくりのためのタンパク質・アミノ酸栄養」	下村吉治 先生 名古屋大学大学院 生命農学研究科教授 ・副研究科長	学科 150 専攻科 26 教職員 15 一般県民 6 報道関係 0
	川口善治 先生 富山大学附属病院 整形外科, 診療教授 富山大学医学部 整形外科, 准教授	合計 197名

(2) 課題

公開講座ということで、本学の学生のみならず、県栄養士会員や地域住民等一般からの参加を増員するため、地域連携センターと連携を図りながら行っていく。また、最新の栄養学等の情報を発信していく担い手としての大学の役割を地域等にPRしていく。

(2) 公開講座

(1) 実績

食物栄養学科教員が担当した公開講座の実施日時や受講者数は、以下の表の通りである。

平成 29 年度

講座名	実施日時	講師	講座内容	受講者数
滑川市福寿大学	5月26日(金) 13:30~14:50	高木尚紘 講師	食生活と身体活動 を見直して、健康寿 命をのばそう	66
富山国際学園福祉 会幼保連携型認定 こども園にながわ 保育園	6月3日(土) 9:30~11:00	角田香澄 講師	♪よく噛んで食べ よう♪こどもと食 べたいおやつ教室	65
富山短期大学付属 みどり野幼稚園	6月24日(土) 9:30~11:30	大森聡 講師	親子で楽しむおや つ作り	52
南砺市大学サテラ イト	8月5日(土) 13:30~14:50	竹内弘幸 教授	油の栄養~ココナ ッツ油、エゴマ油、 トランス脂肪酸~	13
	8月5日(土) 15:00~16:20	田淵英一 教授	認知症予防のため の脳トレーニング	13
	8月9日(水) 9:30~12:00	深井康子 教授	夏休み親子で富山 の郷土料理	4
	10月28日(土) 13:30~14:50	樋口康彦 講師	老年期における心 理と生活	14
富山短期大学	11月25日(土) 9:30~12:00	稗苗智恵子 准教授	おもてなし料理	20

(2) 課題

昨年度より増して地域に密着し貢献していくことや、県内活動拠点の開発が必要と考えられる。

IV 入学者確保

1 学生募集

(1) 実績

平成 30 年度 1 次入学試験で 14 名、Ⅱ期入試で 1 名の入学手続き者があり、計 15 名の入学定員数を確保した。

過去 3 年間の入試区分ごとの募集人員、受験者、入学者の数を表 1 に示した。第 1 次募集では、定員（14 名）より 4 名多い 18 名の受験者があった。本学食物栄養学科を卒業して専攻科を希望して 1 年間の栄養士実務に就いていた 15 名の卒業生が受験した。他に県外から 3 名受験があった。第 2 次で 1 名受験した。

過去 3 年の受験者数／募集定員数は、1.0～1.5 倍の間で推移している。

表 1 平成 28 年～30 年度入試の受験・合格・入学者状況（ ）は男性

入試 区分	募集人員			受験者			合格者			入学者		
	H30	H29	H28	H30	H29	H28	H30	H29	H28	H30	H29	H28
第 1 次	14	14	13	18	15	15(1)	15	15	15(1)	14	14(1)	15(1)
第 2 次	1	1	1	1	0	0	1	0	0	1	0	0
第 3 次			1			0			0			0
計	15	15	15	19	15	15(1)	16	15	15(1)	15	14(1)	15(1)

(2) 課題

- 平成 26～30 年度入試の受験者数推移を表 2 に示した。過去には、定員数が充足しなかった年度（平成 22・23、29 年度など）が何度かあったが、平成 30 年度は定員数が充足できた。その要因として、専攻科の PR を在学生に機会があるごとに説明したり、オープンキャンパス、進学説明会、高校訪問時などに、高校生に対して専攻科の説明を丁寧にしてきたことが定員確保に繋がっていると考えられる。
- 今年度修了生（平成 28 年度専攻科入学生（全員が実務経験 1 年以上有））から、管理栄養士国家試験の早期化による受験資格期間満了が延期されるために国家試験受験が 1 年延長となり、修了後研究生として在籍しながらの活動となる。管栄養士養成施設（4 年制大学）に比べて実質的に学修期間が 2 年間増えるため、今後、専攻科受験者数が減る懸念がある。「研究生」は最長 2 年間、無償で他学科を含む富山短期大学内や国際大学の授業が聴講できたり、国家試験対策講座が受講できるように対策を立てている。対象となる在学生や高校生に対して具体的にかつ丁寧に説明していかないといけない。
- 特別研究では、1 年半かけて指導教員のもとで研究を実施して研究論文（レポート）を仕上げていく。そのため、入学生が増えると、教員一人当たりの指導学生数が増えて指導教員の負担が大きくなっているという問題がある。専攻科教員は食物栄養学科教員を兼務していることや、特別研究を担当していない教員がいることもあり、今後、教育の質を維持しながら指導するためには、個人および学科単位での創意工夫や、特別研究を担当できる教員の育成が必要である。

表2 平成26年～30年の入試受験者数推移 ()は男性

入試区分	H30年	H29年	H28年	H27年	H26年
第1次	18	15 (1)	15 (1)	17	19
第2次	1	実施せず	実施せず	実施せず	3
第3次			実施せず	実施せず	1
計	19	15 (1)	15 (1)	17	23

2 入学試験

(1) 実績

平成30年度入学試験では、第1次受験者は18名で、第2次受験者が1名だった。ここ数年、食物栄養学科生への指導もあり、専攻科を受験する意思のある学生の多くは、第1次入学試験で受験し、不合格となったものが2次や3次試験に臨んでいる。

平成30年度の入試の日程を表3に示した。選考方法は、書類審査70点（志望理由書、成績証明書）、口頭試問20点、面接10点の合計100点満点とする総合評価。

表3 平成30年度の入試日程

日程	出願期間	選考日	合格発表日
第1次	平成29年8月28日(月) ～ 8月31日(水)	平成29年9月6日(水)	平成29年9月9日(土)
第2次	平成30年1月9日(火)～ 1月25日(木)	平成30年2月2日(金)	平成30年2月9日(金)

(2) 課題

- 平成30年度入学試験では、1次の募集人員14名に対し県外の栄養士養成校からの3名を含む18名が出願し、15名が合格した。しかし入学手続きをしたのは14名であった。入学手続きを行わなかった1名は、専攻科在学中に国家試験を受けることが可能と解釈していたため、入試の面接で修了後1年経過してからの国家試験受験であることが分かり、手続きをしなかったことが考えられる。
- 従来、栄養士実務を1年間行い、専攻科に進学して在学中に「栄養学」の学位と管理栄養士国家試験受験が可能であったが、今年度から国家試験について変更になったことの周知がさらに必要である。専攻科への進学が学生にとって有意義で魅力的なものにする必要がある。

3 広報

専攻科希望者のほとんど（平成28・29年度入学生はそれぞれ15名中15名、14名中13名）が本学食物栄養学科卒業生である。そのため、高校生を対象とした広報では、富山県内の高校訪問を実施した際に本学には専攻科食物栄養専攻があり、管理栄養士を養成する科があることを周知することを行っている。そして主に、本学食物栄養学科入学者に対し、向学心の強い仲間たちと2年間勉強だけに専念できる点など専攻科の長所をアピールし、志願者を募っている。また、本学食物栄養学科在学時の早い段階で専攻科進学を学生に意識してもらう

ことを目指している。ここ数年、こういった明確な広報戦略が漸く功を奏し、専攻科進学希望者を確保できている。今後は、向学心の高い学生をより多く専攻科へ導くかが課題と思われる。そのためには、管理栄養士国家試験の合格率を維持・上昇させることが重要である。

(1) 実績

専攻科希望者は本学の卒業生が多い。従って、本学関係者に限定しない一般の高校生対象とする専攻科に関する広報は、直接専攻科志願者を募るものではなく、専攻科があることによる学科への進学意欲の向上と、短大在学時の早い段階での専攻科進学を意識してもらうことにある。

1) 本学訪問、進学相談会、出張授業など

オープンキャンパス、高校関係者の本学訪問時の学科紹介兼ガイド、進学相談会、高校での校内説明会、高校での模擬授業等を実施した。以下に詳細を記載する。

進学相談会

	月日	曜日	場所	担当教員
1	4月17日	月	ウイングウイング高岡	大森
2	6月12日	月	高岡文化ホール	富岡
3	9月19日	火	ANAクラウンホテル	富岡

高校関係者本学訪問

	月日	曜日	対象	担当教員
1	6月30日	金	高校教員対象入試説明会	竹内・田淵・稗苗・深井
2	7月3日	月	富山西高校PTA	稗苗
3	7月6日	木	小杉高校	富岡
4	7月7日	金	龍谷富山高校	竹内
5	7月13日	木	富山いずみ高校	深井
6	7月24日	月	高大連携	田淵
7	7月25日	火	高大連携	田淵
8	7月25日	火	志貴野方向	竹内
9	10月12日	木	泊高校PTA	深井
10	10月21日	土	進学相談会	竹内・田淵
11	12月5日	火	高朋高校	高木
12	12月6日	水	富山北部高校	大森
13	12月7日	木	氷見高校	稗苗
14	12月8日	金	高岡商業高校	竹内
15	12月8日	金	高岡龍谷高校	角田
16	12月11日	月	雄山高校	深井

17	3月2日	金	富山北部高校	稗苗
18	3月28日	水	本学バス見学ツアー	高木

高校での進路ガイダンス

	月日	曜日	高校名	担当教員
1	4月14日	水	氷見高校	稗苗
2	6月14日	水	高岡龍谷高校	山岸
3	6月24日	土	中央農業高校	樋口
4	7月6日	木	高岡龍谷高校	樋口
5	7月10日	月	富山西高校	大森
6	7月11日	火	高岡第一高校	大森
7	9月27日	水	小杉高校	稗苗
8	9月29日	金	中央農業高校	稗苗
9	10月6日	金	小杉高校	小比賀
10	10月25日	水	高岡第一高校	大森
11	1月24日	水	上市高校	大森
12	3月2日	金	高岡商業高校	竹内
13	3月20日	火	南砺福光高校	山岸

高校での模擬授業

	月日	曜日	会場	担当教員
1	6月16日	金	新川高校	山岸
2	7月3日	月	滑川高校	大森
3	7月6日	木	石動高校	深井
4	9月13日	水	雄峰高校	大森
5	12月11日	月	津幡高校	稗苗
6	2月20日	火	雄峰高校	田淵
7	3月9日	金	龍谷富山高校	田淵
8	3月12日	月	富山国際大学付属高校	角田
9	3月19日	月	雄山高校	富岡
10	3月20日	火	泊高校	中根

2) ホームページ・ブログ

専攻科食物栄養専攻のブログは、4月0件、5月2件、6月1件、7月1件、8月1件、9月0件、10月0件、11月0件、12月0件、1月1件、2月0件、3月0件（平成30年3月31日現在）であった。

3) その他

知っとく情報では専攻科食物栄養専攻関係の記事を学科と共同で掲載した。

(2) 課題

1) ブログ

専攻科のブログ記事件数は食物栄養学科と比較すると少ない、今年度は6件のアップとなっている。前年度は9件のアップだったので、若干減少していると言える。食物栄養学科と同じ教員が専攻科を担当していることから、コンスタントに両方に記事を挙げていくことは非常に難しい。しかし、今後専攻科のブログ記事件数を増加させるために、特別研究の内容紹介や、専攻科の授業紹介を積極的に行うことで問題を解決できると思われる。次年度以降も全教員で協力してブログをアップしていく必要がある。

V マネジメント体制

1 自己点検

(1) 実績

専攻科食物栄養専攻の教職員は、食物栄養学科教職員の兼務で成り立っている。そのため、教職員一人一人が、専攻科食物栄養専攻および食物栄養学科のデプロマポリシーに沿って、2学科の運営にあたっている。

前期20回、後期22回の計42回の科内会議を開催し、ほぼ毎週、専攻科に関わる行事、教育、研究について計画、遂行、報告、チェックを行い、潤滑な学科運営に鋭意努力した(食物栄養学科共同開催)。また、アクションプランに基づき自己点検を行い、アクションプランの点検表を作成した。年度始めには、各教員が個人年間計画・評価票を作成し、その内容について専攻科長が点検した。年度末には、個人年間計画・評価票に基づき、業務評価を行った。シラバスについては、専攻科長および教員委員が、記載事項について点検・修正依頼を実施した。

(2) 課題

前述のとおり、専攻科食物栄養専攻の教職員は、食物栄養学科教職員を兼務しており、多忙である。しかしその中でも、全教員が教育および研究に対して意欲を持って取り組んでいる。このよい雰囲気はこれからも継続していきたい。また、教員によって授業持ちコマ数・時間数に差があり、授業時間に余裕のある教員には、時間を要する学科内委員を受け持ってもらいなどして対応しているが、規定もないため、毎年ながら人材配置に苦慮している。加えて、このところ毎年のようにベテラン教員が定年退職しており、新規教員の採用、新人教員の教育、教職員の啓蒙などを人員に余裕がない中で行うことの難しさに局面している。

2 FD/S D活動

(1) 実績

近年、大学主催のFD/S D研修会の機会が増え、本科の教職員も積極的に参加して教育・研究に対する自己啓発を行っている。

(2) 課題

少子高齢化社会により、全国での大学数減少が必須であることや、幼稚園から大学までの連携教育など、教育界全体の大きな動きがあり、本学でも将来構想検討委員会を設置して、10年以上後を見据えた教育改革を開始して実施しているところである。

3 資源の有効利用

(1) 実績

人材:今年度末で退職する教員が1名、次年度4月より新たに採用される教員が1名いるため、学科内の業務分担については見直しを図った。

設備・備品:次年度の教育・研究の充実のために、機器の予算申請を行ったが、予算が厳しかったことから却下された。

(2) 課題

今後も定年により退職予定の教員が控えているので、若手教員の早急な育成が必要である。